

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第192号

イザヤ 65:1

平成23年9月30日

再びヨナに次のような主のことばがあった。「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしがあなたに告げることばを伝えよ。ヨナは、主のことばのとおり、立ってニネベに行った。ニネベは、行き巡るのに三日かかるほどの非常に大きな町であった。ヨナはその町に入って、まず一日目の道のりを歩き回って叫び、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる」と言った。そこで、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着た。このことがニネベの王の耳に入ると、彼は王座から立って、王服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中にすわった。王と大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も、獣も……ひたすらに神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行いから立ち返れ。もしかすると、神が思い直してあわれみ、その怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」神は、彼らが悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。

ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、主に祈って言った。「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか……私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたからです……主は仰せられた。「あなたは当然のこのように怒るのか。」……「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜んでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」

ヨナ書 3-4章

地震観測網が世界一整備され、地震、津波研究の進んでいる日本で今年三月に起きた、これまでの災害想定や定説を覆したM9の超巨大地震と巨大津波、六月から三ヶ月続いた猛暑、八月から九月にかけての先例をみない広範囲を襲った台風による大洪水、事故から半年後も収束がいまだ見えない福島第一原子力発電所の三基の原子炉溶融による放射性物質の放出等々、天災、人災に、異常な円高という金融事情も加わり、日本はすべての領域で未曾有の事態が起り、根底から揺さぶられています。被爆、放射線汚染という深刻な問題に早く終止符を打とうと、今も原発事故収束作業は、多くの人たちの危険を冒しての努力で続けられています。しかしそれは、新しい試みが成功すれば収束のめども立つが、予測しないことが起こる危険もまだまだある予断を許さない状態での戦いです。世界中の専門家が世界最悪のレベル7の原発事故に暗中模索、自国にも、海洋にも被害が及ぶのではないかと日本の収束作業を批判がましく見守っている現状です。多くの人命を一瞬のうちに奪う天災の恐ろしさ、生命は助かってもすべてを失ってしまった被災地の人々の今後の生計の問題、健康維持の問題、復興どころか整地さえなかなか進まない被災地の問題、一体どこから手をつければよいのか、他人ごとではないこれらの現実に全く無力さを感じておられる方が多いのではないのでしょうか。これは日本だけの問題ではなく、世界中が同じように揺さぶられています。パキスタンでは、昨年八月に前代未聞の大洪水に見舞われて以来一年以上も引き続き洪水で、六百万以上の人々が災いを被り、百八十万が家を失い、二百万以上が洪水に起因する疫病に苦しんでいるとのこと。アフリカのソマリアでは、現在、七十五万人が飢餓に瀕していると報道されています。このような世界中の多くの人たちの苦しみを、神は無視しておられるのでしょうか。全聖書を通して証しされている愛と憐れみの神がこのような状態を理由もなく許しておられるとは、考えることはできません。そうであれば、私たちは神の御旨をどのように理解すればよいのでしょうか。

冒頭に引用したヨナ書のだりは、イスラエルの預言者ヨナが、異邦人の国アッシリヤの町ニネベに行き、悔い改めなければ滅びることを告げるようにと、神によって遣わされ、その結果、ヨナの悔い改めの宣教が大成功に終わったことを語っています。同時に、積年のイスラエルの敵アッシリヤが悔い改めて救われることを望まなかったヨナが、神の召名を最初、拒否し逃げた理由が挙げられており、そのヨナの狭量さと、人知をはるかに超えた神の広大な愛が「まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか」というお言葉に頭わさされています。偶像崇拜、不道德、非人道的な生き方に徹し、近東一帯で恐れられていたニネベの人々でしたが、悔い改め、真の神を恐れ、受け入れたことを行動で示したとき、神は町のすべてを滅びから救われたのでした。

四章で構成されている短いヨナ書には、ヨナの召名からの逃避とニネベの滅びからの救いの出来事の中に、ヨナが神から逃げるために乗った船が嵐に巻き込まれたこと、神の怒りを鎮め、船上の異邦人を救うためにヨナが犠牲の死を遂げたこと、三日三晩、死の苦しみを味わった末、神の憐れみによってヨナが大魚の腹の底から甦らされたこと、甦ったヨナが再び召名を受け、ニネベでの宣教の結果、異邦人を悔い改めへと導いたこと、残虐な宿敵ニネベの悔い改めに憤ったヨナに、愛と憐れみの神が「とうごまの木」を通して教訓を与えられたことが記されています。ヨナ書は、一つ一つの奇蹟が神の絶妙なタイミングで起こったことを通して、主権者なる神がすべてを「万事が益となるように」支配

しておられること、神の御旨が減ぼすことではなく、生かすこと、すべての人々が神を知ることによって「真の生命」に生きるようになることであることを訴えています。ヨナに象徴されたのが、善悪を知るモーセの律法を与えられ、契約の民として特権に与り、神の好意、救いを当然のこととと思っていた、しかし実際には神から離れ、反逆していた「神の民イスラエル」であるとすれば、異邦人の水夫たちやニネベの人々に象徴されたのは、善悪を知る神の掟を知らず「**右も左もわきまえない**」で、偶像、混成宗教を信奉し、自分を喜ばせる無節操、不道徳に生きている「この世の人々、異邦人」でした。ヨナ書に記されている多くの事柄、一神の選びの器、宣教召名、犠牲の死、よみに下った三日三晩、苦しみの死、罪人への救いの招き一と、水面下で訴えられている事柄、一逆説的に、神に不忠実なイスラエルの民に対する悔い改めの奨励一、はすべて、来るべき「メシヤのひな型」で、イエス・キリストにおいて具現したのです。また、神に反逆し、しかし、憐れみによって滅びではなく生かされた後、主の御わざを行い、実を結んだヨナ自身こそ、選びの民であるか異邦人であるかにかかわらず、まさに私たち「罪人のひな型」といえるのです。

神がヨナの宣教を大成功へと導かれた背景には、天文学的、考古学的、歴史的考察から、ヨナがニネベに送られるはるか前から神の十分な備えがされていたことが分かっています。当時、ヨナの預言通り、北イスラエル王国がヤロブアム二世によって、国勢を取り戻し、領土奪還、拡大、経済的繁栄を謳歌して、それゆえ、霊的に墮落していたのとは正反対に、大帝国アッシリヤは低迷期で、敗戦、領土喪失、皆既日食、地震、飢饉、疫病の大流行に国家がひどく揺るがされていたのです。偶像崇拜と迷信を信奉していた人々にとって神々の怒りとみなされたこれらの凶兆が何年も続いていたとき、魚の腹の底で、皮膚が胃酸で冒され、真っ白になったヨナが異様な不気味さを伴って、突如ニネベに現れ、四十日後の滅びを宣言したのです。自分たちの魚の神「ミトラ」はじめ、偶像の神々に嘆願しても国家情勢が衰退するばかりだったときに、ヨナが真の神ヤーウェによる悔い改めを通しての救いを語ったのです。おそらく、ヤーウェによるイスラエルの民の多くの奇蹟的救いを聞き知っていたニネベの人々は、そのタイミングでもたらされたメッセージを真剣に受け止めたのでしょう。町を挙げての罪人の救いという大奇蹟が起ったのです。

ユダヤ教の秋の「主の例祭」は第七月の一日の「新年“ロシュ・ハ・シヤナ”」と、同日の「ラツパの祭り」で始まりますが、この日からユダヤ教徒は自分自身を探り、人と和解し、罪を悔い改め祈る日々を送り、九日目の「贖罪の日“ヨム・キブル”の前夜祭」の日没から十日目にかけて二十五時間の断食をし、罪が赦されるクライマックスの日を迎えます。今年の“ロシュ・ハ・シヤナ”は9月28日の日没から30日の日没までの二日間、“ヨム・キブル”は10月7日の日没から8日の日没まで守られます。贖罪の日には、ヨナ書の全章が朗読されるのが慣わしで、この日に一年間の罪が赦され、神との正しい関係で、また新たな一年が始まるのです。伝統では、出エジプト後の荒野でイスラエルの民が金の子牛崇拜の背信に陥った後、モーセが神に民の赦しを執り成し、新たな十戒の二枚の板を持ってシナイ山から下りてきたのが「第七月“ティシュリ”の十日」、贖罪の日であったとされています。モーセが四十日間シナイ山にいたことに因み、正統派のユダヤ教徒はこの日からさかのぼって「第六月“エルル”の一日」から四十日間を悔い改めの期間としています。モーセは、自分の名が生命の書から取り除かれてもよいから、反逆のイスラエルの民を滅ぼさないでくださいと執り成したのですが、モーセが予示したことが西暦一世紀初頭、イエス・キリストの罪人のための身代わりの死によって具現し、全人類に、「永遠の生命」に与る救いの道が開けたのです。

ユダヤ教の伝統によれば、新年を画する“ロシュ・ハ・シヤナ”には、義人の名は「生命の書」に記され、悪人の名は「死の書」に記されますが、大部分の人々の名はいずれの書にも記されないのです。そこで、“ヨム・キブル”までの十日間が重要な意味を帯びてきます。人々は「生命の書」に名が記されるように、神との関係、人との関係を吟味し、心からの悔い改めの日々を過ごすのです。ユダヤ教徒にとってだけでなく、キリスト者にとっても、「**もし私たちが、神と交わりがあると言っているなら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っている……しかし、もし神が、光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちが互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。もし、罪はないと言うなら、私たちが自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます**」(ヨハネ第一1:6-9)に照らして、自分を吟味する時期でもあるのです。また、「**あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい**」(ヤコブ5:16)、「**だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります**」(ヨハネ第一5:16)と人々のために執り成しをする時期でもあるのです。

神は、裁きを宣告されるはるか前からニネベの町に天災、人災を通して警告を送り続け、最後に神の預言者を送って御言葉を告げさせ、天地万象を支配しておられる真の神がおられることに人々の目が開かれるようにと導かれました。同じように、今、真の神ヤーウェは、日本だけでなく、全世界を揺るがし、神不在で築き上げられてきた人類文明を崩壊し、「なぜ、なぜ？」と人々の心に真理への飢え渴き、神意を求める心を起こしておられます。それは、神の言葉を聞いて悔い改め、救われるチャンスをすべての人々にもたらすための、神の愛がゆえのご介入です。真の神の約束しておられる救いは、この世での限られた生命の救いを越えた「永遠の生命」への救いで、神は全人類の霊の覚醒のときを、世の終わりに計画しておられるのです。創造者なる神は、ご自分の被造物の滅びを決して望んではおられないのです。